

丸本 隆編

『初期オペラの研究』

彩流社 二〇〇五年

吉田 裕

この書物は、早稲田大学演劇博物館が研究拠点として採択された二一世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」の中の「西欧演劇理論研究グループ」の研究成果として刊行されたものであって、二人の著者の論文を集めている。編者の丸本隆氏は、法医学術院の教授である。丸本氏は以前からこのグループのリーダーであり、二〇〇三年には、同じく編者として『オペラの一八世紀』（彩流社）を刊行していて、日本では未開拓な（ドイツでもそうらしいが）領域である創生期オペラ研究の推進者である。今回の書物には、法医学術院からは、弓削尚子助教授も参加されている。私たちの

同僚の間に、未知の分野の探索に乗り出す研究者がいて、その人たちがこのように研究成果を書物にまとめられたことを、まずは喜ぶたいと思う。

この書物に収められた論文は、かなり専門的であるが、それでも、『魔笛』や『カルメン』のビデオを時に見る程度の私のような素人でも楽しめるところが、ああそうだったのかと示唆を受けるところがたくさんある。丸本氏は序章「オペラ研究の現状と課題」で、編者として従前のオペラ研究を総括し、その上でこの領域で今何が必要かをわかりやすい形で示してくれる。曰く、オペラ研究は、これまで、音楽の側に、あるいは台詞という文学テキストの側に引き込まれて一方的に解釈されてきたが、今日目指されるのは、〈演劇メディアを舞台芸術やパフォーマンス・アーツ、表象芸術や劇場文化の一環として総合的に把握しようとする方向性〉なのだ。この方向性は、まずは音楽と劇という二つの軸間の交流をよみがえらせる。だが、交流がはじまると、その中には、音楽と劇への関心だけではなく、ひとつの時代の価値

観、社会、風俗、権力、男女関係、信仰、哲学、などに向かうあらゆる視線が呼び寄せられ入り込んでくる。ここに収められた一二の論文の主題の多様性は、この交流からきている。

丸本氏は序論のほかに本論文として、「一八世紀オペラのダイナミズムとジングシュピール」を書いている。

これは、ドイツ・オペラの前史的形態であるジングシュピールの研究である。このジャンルには、モーツァルトの『後宮からの脱出』や『魔笛』も含まれるようだが、それらは通常、すでに近代的なオペラ概念のうちに取り込まれて理解されているが、そこにはまだ創生期の混沌とした要素が含まれている。丸本氏は、もう一度生成の場に戻すことで、ドイツ・オペラが、どんな可能性を含んでいたかを示してくれる。

ジングシュピールは、丸本氏が序文で示したような演劇と音楽の狭間の様々な度合いに加えて、一六世紀に成立したイタリア・オペラの圧倒的な影響があって、専門家も定義付けを放棄するような曖昧模糊としたジャンル

なのだが、それが丹念に跡づけられる。ドイツでの音楽劇は、はじめはイタリア・オペラの直接の移入により始まり、ついで歌詞のドイツ訳によってなされ次第にドイツ化されていった。同時にそれは、専門的で高度な技術を必要とするアリアに変えて、ドイツの俗謡と通じ合うリート風の歌曲を導入することでもあった。しかし、この傾向は、高度な歌唱法を求めることへ反転することもあった。あるいはそれは担い手を宮廷から市民層へと移行させたが、さらに後者が十分に発達しなかったというドイツ的な事情によって、再び宮廷歌劇場へと戻させた。このあたりの行きつ戻りつする錯綜した事情は、ドイツの近代史の縮図であり、そこに時にナショナリズムへ傾くこともあったドイツ・オペラが現れてくるのだろう。分析は両者に関する確かな知識で裏付けられている。

ジングシュピールの特徴の一つは、アリアをつなぐ部分で、「語るように歌う」レシタティーヴォによってではなく、ふつうの演劇のように台詞で表現するところ

だ、という。モーツァルトの『後宮』や『魔笛』もそのような箇所を多く含んでいたが、オリジナルではあったこれらの台詞の部分は、今日の上演形態では、大幅に削除されてしまっているらしい。私はこのことを知らなかったが、このオリジナルな『後宮』や『魔笛』を見てみたい、聞いてみたい、と思う。そして、日本では知られていないモーツァルト以外のジングシュピールを見る機会が増えれば、と思う。

弓削氏の「カストラートの衰退と女性歌手のジレンマ」は、変声期前に去勢手術を施されることでボーイソプラノを維持し、バロック音楽の華として人々を魅了し、けれども近代の開幕とともに消えていったカストラートと呼ばれる歌手の盛衰をたどった労作である。バロック期とは、自然に手を加えた人工的な美に魅力を見いだした時代であり、そのことが男でもなければ女でもなく、あるいは子供でもなければ大人でもないという一種の神秘的な存在を可能にした。しかし、この両性具有的な存在は、近代的な自然観、すなわち自然な男女の身体

の差異に基づく男性歌手女性歌手という分類によって、次第に排除されていく。

この構図は説得的だが、論文は、カストラートの消滅を示すだけで終わってはいない。印象的だったのは、筆者がカストラートが排除されていく必然性を認めながら、なお、それを排除した近代的な自然と身体の意識が、引き続き、男女二者の相補性以外の可能性をあらかじめ拒否してしまうことに対する疑念が提示されていることである。女性歌手あるいは女優の意義は認められたようでありながら、今度は、公的な場に出て「見られる存在」となるうとすることは、女性にふさわしくないと、改めて排除されていくのが見届けられている。こちらのほうが、筆者のより強い問題意識なのかもしれない。カストラートを復活させることは出来ないだろうが、カストラートがその一端を示していた潜在的な可能性は、なお反芻する余地があるということだろう。か。

蛇足を加えると、この論文を読みながら、平凡な反芻

だろうが、日本での歌舞伎の「女方」のことを考えた。安土桃山のおそらくはバロック的といえる時代に現れたこの存在を、私たちの文化はなお保存している。また男性が女性の役を演じる演劇は世界各地にあったようだ。それらがどのような性の意識によって受け入れられ、どのような社会の規範によって制御されていたのか、それは今日どのように消滅しあるいは存続しているのか、こういう点についてもっと教えてもらいたい気がする。

前者の論文はドイツ・オペラに、後者の論文はイタリア・オペラに関わる問題を取り上げているが、ほかにフランス・オペラについての論文も含まれている。だからこれは、各国のオペラの創生期に関する広範で綿密な研究書であるのだが、広い意味では、一つの文化はどのように形成されるかのケーススタディでもある。その意味で、社会と文化に関わる多様な関心に応える一冊であるだろう。